

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	別れの歌 : 文苑
Author(s)	錦浦, 愁人
Citation	龍南會雜誌, 116: 71-72
Issue date	1906
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5966
Right	

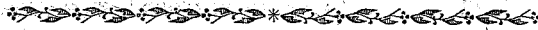
露ふりこぼし花ふみて
いしぶみひくき無縁塚
晝あそびけん里の子の
蓮花草の束に尾をふれて

檜の葉にわく士團子
足にくづすはかたかるに
ころがしやれば寂寥の
そよぎは草にみちぬかな

別れの歌

錦
浦
愁
人

野をゆく水にたどへけん
時とは遂に幼子の
老ひゆく先を呪ふべき
かたちみにくき神の名か
あゝ二十年の夢ゆれて
今は別れとなりにつけり



見よ安濃川の春風に
柳のみだれつらくとも
流れに淀む小櫻の
花の姿をかへすべき
よすがもあらで今更に
破れし小笠の夢ぞうき

かへすうつゝの思ひ出も
藤さくむろにまごひして
衣桁にかけし旅衣の
小袖を侘ぶる我れなれば
遠の山べにさすらひて
かさねん夢はつられれど
小琴に凭らんせめてたゞ
別れせはしき花かげに
炷すとも憂態の

人の涙は乾かじを

十三絃はしら糸の

しらべみだれし『浮舟』や

さば今更にその歌の

悲しき文字に泣かんやは

『沈黙』が示す光明を

永久の生命のなじみにて

連翹にふる春雨を

人の涙とよばん哉

涓流遠く野を遊いて

望郷低唱

みどり野にまる寝の晝の夢乗せて母ます郷に吹けよ春風

花

柴

岸邊の花はたそがれぬ

はろくかすみ紀の山の

雲より落つる瀧津瀬に

もゆる心を冷すとも

夢のたぐちの胸の内

立ち別れなばあゝ人よ

四つの袂に重ぬべき

夢はこれよりしげくして

不壊の笑まひはなかるべし

海にのぞめる欄干に

別れの曲をいざ奏でなん